

## ノストラダムスの大予言 補遺

やや旧聞に属するが、再掲載します。(2008.05.24.)

ノストラダムスの大予言(長文です。いずれ掲載しますが。)を書いたあと、田中千代松氏の「第四の世界」を読み返していたら、以下のような文章が目についた。じつは学生時代に読んでいてボンヤリ覚えていたのだが、ここに正確に記することにした。

長南年恵(オナナ・トエ)という人がいた。山形県鶴岡市の人。明治 25 年頃か  
らしばしば予言をし、日清戦争の予言など細かいところまで悉く(コボトク)あ  
たっていたらしい。事実かどうかは別だが、食べるものは生(ナマ)のみで、  
火をいれたものを飲み食いさせると、血を吐いて倒れたという。(弟がきちんと  
した人で、その記録を遺している。この弟は学問もあり、はじめは母親がいう  
この姉の行状を全然信用しなかったらしい。)生水を少々飲む程度であったが、  
身体は頑健そのもので、力仕事もできたし、不思議なことだが、大小便をまっ  
たくしなかったという。留置所で便所を封印していても一向に平気だったとい  
う。明治 40 年に突然亡くなったがその予言・予知能力は、明治 25~40 年まで  
持続した。

当然、田舎の人間だから周囲は「生き神さま」とあがめるから、たとえば弟  
が大学病院の精神科の医師にみせようとしても、これを阻んで、結局本物かど  
うかわからなかった。

この人が、鶴岡警察署に逮捕・拘禁された。明治 28 年 7 月に 60 日間、29  
年 10 月 10 日より 7 日間である。(因みに、明治 29 年は、1896 年である。)そ  
の理由が鶴岡警察署に記録として保管されている。

### 「みだりに吉凶禍福を説き、また詐欺行為を以って愚民を惑わし世を毒する者」

100 年後の現在はどうか、と小生は問うのである。ノストラダムスがこうい  
っている、と称して、多くの本を著し多額の印税を手にいれ、世人を惑わせて  
いるのは誰か。世界中で同じことをしている。それをたとえばハルマゲドンが  
近いとか、この宗教に入信しないと滅亡するぞと脅し、私利私欲を貪っている。

上の話でいえば、当然逮捕監禁するべきである。また、それに踊らされている者は「愚民」と指摘されている。

今、本屋に行けば、予言書のオン・パレードである。しかも、いずれもノストラダムスの 1999 年に惑わされているから、全部「嘘くさい」。

すこしばかり予言者の追加をする。予言者というよりも、わけのわからぬうちに「予言」をしていた、という方が適切かもしれない。

(なお、予言については、あたったことのみが強調されているが、はずれたときは、不明を恥じる人と知らぬ顔をする人がいて、これは人柄もあるようだ。)

ひとつは、タイタニックのような無名の青年が書いたものではなく、エドガー・アラン・ポー Edgar Allan Poe (江戸川乱歩はこの名前をもじったもの。) が書いた小説である。この話を短くまとめると、4 人の男が難破して漂流中に食糧が尽きた。そこで籤をひいてあたった者が殺されて、その人を食べることに決定した。その当り籤をひいた男の名が、リチャード・パーカー Richard Parker である。1838 年刊。ところが、1884 年に全く同じ状況で、籤をひいた男の名が Richard Parker である。当然彼らは、この小説についてはまったく知らない。これを発見したのが、パーカーの親戚の人である。

夢のような話でもうひとつ。

1883 年 8 月、インドネシアのジャワ島とスマトラ島との間の小さな島で火山の大爆発があり、島は、幅 4.8 km 長さ 8 km であったが、その爆発によって、わずか 10.7 平方 km になってしまった。これがクラカトウ島の大噴火であり、19 世紀最大級の火山爆発といわれている。爆発音が、オーストラリアまで (3600km) インド洋のロドリゲス島まで (4800km) 聞こえたという。スンダ海峡の沿岸では 30 メートルの津波がおしよせたというし、クラカトウ島の 300 以上の村が全滅。ジャワ島でも、36000 人が死亡し、噴煙は 50km まで達し、以後 3 年間、世界各地で灰色の太陽が確認された。(大噴火のあとにはこのようなことがよくある。)

米国ボストン Boston のエド・サムソン Ed Samson 記者が徹夜のあと、まどろんでいたときに夢をみた。これが「プラレイプ島」の火山爆発で、かなり

生々しかったらしい。夢のシーンを今見たとおりに、取材したような感じで記録した。（この時点ではスクープなどということはまったく考えておらず、夢を記録しただけである。）そして、そのまま帰宅した。

翌日、編集長が、外電がはいったものと考えて新聞に掲載した。ところが、それらしい情報がその後まったくなく、（時代は 19 世紀である、現在のような情報網があるわけではない。）さらに、地図で調べても、そんな名前の島が見つからないのである。しかし、インド洋や太平洋には津波がきていたが、詳細は不明のままであった。（Boston は大西洋側である。）そして結局はデッチ上げだということになり、サムソンは轟々（ゴウゴウ）たる非難の嵐に曝されることになった。実際に新聞がそんなに売れていたわけでもないと思うし、「非難の嵐」とあるが、本当かどうか。いずれにせよ、この時点では誤報と判断されても仕方がない。……ここで面白いのが、彼がクビになったことである。（日本の新聞でもしばしば誤報があるが、クビはあまりないし、もし誤報がクビの原因とすれば新聞記者は絶えているだろう。）

2 ヶ月後、8 月 27 日の噴火の様子が、たまたまそばを通りかかった船に乗っていた人々によって情報がもたらされ、サムソンが主張するように、嘘をついていたわけではなかったことが判明し、名誉を回復した。新聞は、顔写真を載せてたたえた（恥も外聞もない）。その上、その島の名前についても、プラレイブ島は 150 年前までしか使われていなかったもので、現在は使われていないことまであきらかになった。

この夢によるスクープもそのメカニズムについてはわかっていない。実際、ボストンからみれば、インドネシアは地球の裏側である。その「映像」が伝わる条件はいかなるものか。

関英男さん（こういう状態を説明するのに「幽子情報仮説」を提唱しておられる。幽子とは「超光速」の粒子で、うけとめることができる人とできない人とがあるという。これが情報の源であり、われわれがふつうにうけとるのは電波であるとか音波であるとか、いずれも光速よりも速度の遅い実体として感じられるものである。）によれば、このとき「幽子」をうけいれる状態に精神になっているという。こういう精魂尽き果てて、ウトウトと「まどろんでいる」状

態がもっともいいというわけである。脳髓をしぼるようにして考え、その挙句に疲れ果てて自分が自分でないような感覚のときに、寝ているでなし、起きているでなし、という状態。

このもうひとつの例。日露戦争の日本海海戦の直前、参謀秋山真之中佐の脳裏にありありと浮かび上がったのが、黒煙もうもうとふきあげてこちらに向かって縦列で移動してくるロシアのバルチック艦隊の姿であり、そこは紛れもなく、対馬海峡である。

この頃、バルチック艦隊がどこを通過するか、日本中の問題であった。はるか南、日本の南方を通り津軽海峡を通過してウラジオストックに行かれたら、事実上日本は敗れ滅亡する。第二艦隊があるが、これも含めて一大決戦をしなければならない。(個々に戦うと敗れると考えられていた。)「坂の上の雲」にこのあたりの情報は詳しいが、沖縄の宮古島沖をバルチック艦隊が通過したときの島の人々の努力は賞賛に値する。しかし、秋山中佐の超自然体験については、全く触れていない。

秋山中佐は、30代後半、日本の浮沈はこの男の作戦にかかっている。ものすごいプレッシャーであっただろう。あらゆるケースを想定し、敵の陣備えと味方の陣備えを幾度も思い浮かべては消し、これを繰り返した。ある夜、人智を超えて考えに考えた後疲労困憊(ヒロコノパイ)し、まさに先述の「まどろんだ」状態になったときに、「見えた」のである。この時点で日本の海軍は「勝った」のである。……この時刻、冠島にこもって祈っていた出口なおが、やおら「神さまの御用がすんだ」と言った。のちに大本教を訪ねた秋山中佐が夢中になったことが思い浮かぶようである。(大本教については別に述べる。)

一般に、予言には、必ず論理の飛躍があるもので、たとえば株価の動きをじっと観察し、半年後・1年後にはこうなるだろう、というのは予言ではなく「予測」である。また、同じく予言といっても、ディクソン夫人とかケイシーのように具体的にある事柄をいうのはいいが、ソートン(この人も医師で予言者で有名な人)があるときに言った「1959年にはアメリカ中を震撼させる事件がおきるだろう」というのは範囲が広すぎて、「予言」とは認め難い。これくらいなら、オレにも今すぐにでも言える。出口なおの言うように、「ケ(気)もないうちから知らせてあろうがな。」の方が本物の予言だと思う。

先の長南年恵の話にもどるが、この女性は近所の人から「極楽娘」と呼ばれて、いろんな予言、たとえば日清戦争の経過や、近所の人に近い将来のことを述べたり、病氣治しでは、北海道からも人がやってくる状態で、ことごとく的中していたという。ほとんど飲み食いせず、一人前の力仕事もできる。弟さんは都会に出ていたので、世話をしていたわけではないが、警察や裁判所にも出廷して自分の姉を弁護してきた。都会に出てきたときに京都帝大の専門家にみせるつもりで京都に連れてきたが、「生き神さま」と信じる信者に邪魔されて、結局断念した。裁判所で、聖水といって「万病に効く」という水を一瞬のうちに空瓶に満ち溢れさせたこともある。亡くなる2年くらい前からしきりに自分の死期を予言し、明治40年に急死したらしい。(この話は浅野和三郎の調査によるもので、この人も一時大本教に入信していた。)

余談であるが、さきほど「極楽娘」と書いているが、別に差別用語でもない。江戸の昔から、農村に知恵の遅れた子供が生まれると、まあ、相談も持ち掛けないだろうが、抹殺することはしないようだ。現今、大会社では一定の数の障害を持つ人を雇用しなければならないことになっている。一部の人権派弁護士と称する変な連中が騒ぐことがあるが、差別の有無など関係なく、古人は、「知能の低い人間がいるから、同じ数だけ天才・秀才が生まれる」ということを経験的に知っていたらしい。現今の、知的障害者や身体的障害者を差別することがいかに無意味なことかわかるであろう。差別用語とか、差別主義者だとか烙印をおして社会から抹殺しようとする勢力の馬鹿さ加減もわかるだろう。

超能力者の研究は、上の長南年恵や出口なお、中山ミキなどののち、福来友吉博士や浅野和三郎博士らがでてから始まった。長尾郁子、御船千鶴子がでてからである。三田光一など、昭和6年に「月の裏側」を念写している。これらについては、稿を改めて述べる。なお、浅野和三郎は大本教にも深く関与しており、さきの秋山中佐とも関連があつて、日本の心霊研究の草分け的な存在である。

この補遺は、長南年恵が警察に逮捕され、その理由が、今のノストラダムス・

ブームに対して言いたいことそのまんまであったからである。五島にしろ、池田という馬鹿にしろ、あるいは、全米ノストラダムス協会（と書けばずいぶん大きな組織のようであるが、つまりは有志数人とかの話ではないだろうか）会長のなんたらいうのんとか、「いたづらに不安を煽り、世間のおろかな民を誑かす」連中がのさばっていたからである。池田なんか、自分が予言の読み方を間違えているのを知らずに、イタリアまでベスピアス火山がごく近い将来爆発する、と行って当局まで行った。よくまあ、袋叩きに合わなかったものである。

1999年と2000年に我が家にホームステイした人に尋ねたら、最初の David McMahan は、「それは悪魔のような男のことか」ではオレではないか、と言ったし、Allyn アレンさんにいたっては、小学校の先生だから、「聞いたことがあるような気がするが、何をした人か知らない」といった。要するに、騒いでいたのは日本の「愚民」だけだった、という話である。この間、TV 放送で放映するのは、当然バラエティ番組でである。

ノストラダムスは、すでに生前、私の予言を曲解し、世間を騒がす人が数多くでるだろうと、このようなことまで予言していた。まるで、「見て来た」ような予言である。

2000.07.28.

ずいぶん以前に書いたものであるが、このところブラジル人ジュセリーノの予言が取り沙汰されることが多くなってきた。「予言」があたっていることは大々的に書いている。大事件だけでなく、小さい事件まで予言しているのだが、四川大地震やミャンマーの水害については記載されていない。地球温暖化に警告を発しているのだが、これについては後世の判断になる。……（そういう意味では長生きしたい。）また10年前のように大騒ぎとか空騒ぎをするのだろうか。

2008.05.23.

ちなみに、小生は地震の予知などについては、科学者（地震予知連絡会？）よりもまともな「予言者」の方が信用できると思っている。だから、ジュセリーノの予言が当たっているかも知れない、くらいは思っている。現実に関東大地震は50年以上前から「いつ起こっても不思議はない」と言われ続けている。いっつも起これへんうちに神戸や新潟で大地震が起こった。信用できますか？